

1997.12.15

— サムラングだより —

**治安は…** サムラングのここ3ヶ月間の最大の課題は治安の回復でした。集落の近くで対立抗争を続けていた二つのグループの性格が今一つはっきりしませんが、コミュニティーの住民にとっては、畑仕事も手につかない日々だったようで、3分の1ぐらいの住民はCMB（ビラーン・カトリック・ミッション）の説得にもかかわらず一時サムラングを離れました。

かつて、日本軍がこの地域に入ってきた時も、長老の話では一時村を捨てて逃げたとか。もともと狩猟採集および焼畑が生業の住民にとって、日々の糧が手に入り、一族郎党平和に暮らせるところがムラであって、難を避けて移動することは極めて自然の行動かも知れません。

しかし、1970年代のポロモロックで、イスラム教徒と政府軍の激しい戦闘を避けて避難したビラーン族が戻って見たら、マトウトウン山の豊かな山麓の先祖伝来の農地が、一面ドールのパイナップル園に変わっていた例のように、農地も森林も地下の資源さえも価値ある投資対象となった現代フィリピンにおいて、「逃げるが勝ち」は賢い選択ではないようです。

先住民が住んでいても私有地として登記されていなかった18度以上の傾斜を持つ山岳地域は国有地と法で定められています。「先祖伝来の土地」であるという点が唯一自分たちの土地であるという主張の根拠になっている先住民にとっては、なおさら住み続けることが重要になっています。

**新設のサムラング分校は・・・子どもたちは・・・** サムラングでは、神父などミッションの関係者がいる間だけは治安が保たれているという状況がしばらく続き、それでも10月24日には、3つの教室からなる校舎の竣工式が無事行われました。HANDSおよびJOFPA（建設資金は、この「チボリ国際里親の会」からの支援）を代表して参列してくれたレイクセブ滞在中の会員・森田奈美さんは、テープカットのテープの一部を送っていただきました。（授業は7月から始まっています）

昨年11月の住民待望のクリニック（ライフ・センター/KLAWIL GUTNGA）竣工に続き、1年後のこの校舎完成は、一部の住民、子どもたちにとって厳しい状況の中でもコミュニティーにとどまる吸引力になったようです。

難を避けて、あるいは食べ物を求めて周辺地域に散っていた人々もようやく戻り、サムラングは平静を取り戻したとの朗報が2週間ほど前に届きました。しかし、6月の開校当時60人ほどいた子どもたちの半数はまだ学校に戻ってきません。もともと貯えるほどの余裕のないこの地域で、3ヶ月近い畑仕事の中断は、最悪の食糧不足を招いてしまいました。ロバートとエルナ（新任）の先生二人が家庭訪問したところ、子どもも含めて食糧探しの日々とのこと。

**4ヶ月だけ子どもたちに給食を……** CMBはこれまで、栄養失調が授業中の集中力欠如の一因と感じつつ、食べさせることは親の責任という方針で給食を実施してきませんでした（資金不足も理由？）。これはCMBのビラーン族に対する教育普及の方法とも関係しているようです。住民が教育の必要性や子どもの教育に対する親の責任を十分理解し、コミュニティーの組織化が進んだ段階で公立移管を進め、新たな地域で再び学校作りから、という支援方針をとっています。ミッションに頼りきりを警戒しています。

あえてこの方針を曲げて、とCMBは11月末のファックスでHANDSに協力を要請してきました。もっと早くお願いしたかったが方針変更躊躇もあってとも。HANDSの皆さんが支援してくれるなら、次の収穫期来年4月までの4ヶ月間に限って、週3日だけサムラング分校